

RUBeC 演習を終えて

辰 己 琢 郎

Takuro TATSUMI

機械システム工学専攻修士課程 1年

1. はじめに

私はアメリカ合衆国カリフォルニア州のバークレー市にある RUBeC (Ryukoku University Berkeley Center) にて、2017年8月19日から9月4日まで RUBeC 演習に参加しました。期間中は、英語でのライティングとプレゼンテーションのスキルについて学びました。また、協定校への訪問と現地企業の見学を行い、海外の大学・企業の様子を学びました。

2. 参加目的

RUBeC 演習への参加目的は英語での発表能力を伸ばすことです。これまで、研究について英語での発表を行ってきましたが、今後の目標とする学会での発表や、英語論文の執筆のためには自らの英語での発表能力を発展させる必要があったため、研究室外で発表する経験を今後活かそうと考え、参加しました。

3. 授業について

3.1 テクニカルライティング

テクニカルライティングの授業では、学術的な文章を書くために必要な文法を学び、事前に作成した英文要旨を校正しました。

まず、冠詞やキャピタライゼーションについて学びました。文中で初めて書く名詞かどうかによって「a」、「an」、「the」を使い分けることは文章の読み手に理解してもらう上で大事なことだとわかりました。また、タイトルや文中でキャピタライゼーションのルールに従い、大文字と小文字を使い分けることが大事だと学びました。次に、接続詞や受動態について学びました。学術的な文章に適した接続詞を

教わり、一文を羅列するのではなく、適切に文をつなぐことが大事であることがわかりました。また、受動態を用いて文章を作成することが重要であることがわかりました。これらの学んだことを用い、龍谷大学の先生と講師の方からアドバイスを頂きながら英文要旨の修正を行いました。最後には、英文要旨の内容を1回3分間で相手を変えながら説明する発表会を行いました。この発表により、専門分野の違う人に対し、どのような表現で説明すれば良いかを知ることができました。

3.2 オーラルプレゼンテーション

オーラルプレゼンテーションの授業では、発音やアクセント、発表に大切な話し方を学び、事前に作成した資料を修正しました(図1)。

まず、基本的な発音を学びました。例えば、「L」と「R」の違いから教わり、口を大きく使って発音することが大事であると学びました。また、アクセントを学びました。動詞と名詞でアクセントの位置が異なることを教わり、これまで意識していなかったことを改めることができました。次に、発表を伝えやすくする話し方を学びました。専門用語など、難しい単語などもジェスチャーにより伝えることができると学びました。さらに、単語の区切り方で意味が違って伝わることを教わり、注意しながら発表の原稿を区切っていきました。また、効果的な発表資料の作成方法を教わり、最後に5分間で発表を行いました。講師の方からジェスチャーは良いが、発音に問題があると評価を頂いたことから、今後は専



図1 オーラルプレゼンテーションの授業の様子

専門語を中心に発音を練習することが必要だと考えます。

4. 協定校訪問と企業見学について

4.1 UC Davis

協定校である UC Davis を訪問しました。印象に残ったのは、工学部で多様な学問の教授が研究を行っていることでした。例えば、運輸技術の専攻では、新たな輸送システムを社会に導入するために行政の整備が必要のため、経済学の教授が関わっているそうです。このように、さまざまな分野の教授が各専攻に所属していることで、学生が他分野からの意見を聞き、自分の研究に役立てることができるそうです。また、農学、医学、獣医学の専攻も提携して研究を行っているとのこと、一つの専攻の中で工学の教授が研究を行っている日本の大学との違いを感じました。今回の訪問により、アメリカの大学の研究に対する姿勢を知り、自分の研究活動への刺激となりました。

4.2 Keysight Technologies

世界最大の電子計測器メーカーである Keysight Technologies を見学しました。印象に残ったのは、製造に関わる製品を自社で製造されていることでした。計測器に使用される半導体なども原料から自社で製作しており、今回見学させていただいた携帯電話などの機器を温度変化の下で検査する装置も自社製でした。また、この装置を販売していると伺いました。例えば、宇宙でシャトルが振動する挙動を検査したい顧客のために振動の機能を追加したり、極端に低い温度での検査がしたい顧客のために液体窒素を使用したりしているそうです。今回の見学により、Keysight Technologies は製品を原料から作り、

検査装置まで自社で作りにあげていることから、高い技術力を感じました。また、廊下に社員の方が撮った写真が貼られていたり、敷地内に多くの植物があったりと、息抜きの場を拝見したことで、メリハリのある仕事が結果につながるのだと感じました。

5. ホームステイについて

ホームステイ生活では日常会話がすべて英語であったため、ホストマザーに休日の予定や、夕食の有無などを伝えるのに苦労しました。徐々に慣れてくるとコミュニケーションがとれるようになり、アメリカで有名な店の話などの会話もできるようになりました。海外の方と暮らしたことにより、文化に触れることができ、貴重な経験をすることができました。

6. おわりに

RUBeC 演習を通し、授業とホームステイ生活から、英語での発表において聞き手に内容を理解してもらうために必要なことを学びました。今後は得た知識をもとにさらなる英語学習に励みたいと考えます。また、お世話になった講師の方々、龍谷大学の先生方（図2）にお礼申し上げます。



図2 講師の方々との集合写真